

(122) 栃木県塩原市の絹雲母鉱床・第3塩原鉱山

参考文献(1)によれば、この鉱山は絹雲母を産出し、中塩原からシラン沢に沿って約4 km北上すれば、本鉱山に達する。沢に沿って鉱床の手前約300 mの地点まではオート三輪車を通る程度の道路が完成している。この鉱床は戦時中に発見され稼働されたが、その後台風で運搬炉が破壊されて休止。鉱床は沢に沿って大小5箇所あるが、めばしいものはそのうちの3つであり、下流から第1、300 m上流に第2、更に100 m上流に第3鉱床・・・しかし、鉱山名は明記しておらず、「塩原絹雲母鉱床」とだけ記している。

参考文献(2)によれば、海拔800 m、現場から中塩原の鉱山事務所までの4.5 kmの間に、木材運搬用トロッコ道。鉱床はスカルン鉱床であり、鉱石は主に閃亜鉛鉱、方鉛鉱、硫化鉄。主な鉱床は8箇所・・・本鉱山名は「塩原第3鉱山」と明記されている。

文献(2)には、絹雲母に関しては何の記述もない。一方、参考文献(1)の方には、主体鉱種は絹雲母。登録鉱種として金・銀・銅・鉛・亜鉛・硫化鉄鉱の記述がある。が、探査の結果も合わせて、これら2つの鉱山は同じ鉱山であると推断し、鉱山名は第3塩原鉱山とする。

同じ鉱山で、主要産出鉱物が変わるのはそう珍しいことではない。「第3」ならば、第1、第2と称した鉱山があったと推測できる。文献(2)の添付図中に、シラン沢ではない他の近郊の沢沿いに「第1塩原鉱山」名を確認はした。が、「第2塩原鉱山」名は、現在未確認である。

資料調査により、第3塩原鉱山の存在と現地近傍の様子が確認できたので、まずは第3塩原鉱山の探査を始めた。しかし、この鉱山跡を確認するのは容易ではなかった。

1回目の探査。シラン沢を下流から遡上し始めた。そのうちに眼前に、巻くにも巻けそうもない大きな砂防ダム。断念。が、1回目の探査の成果として、沢の左岸上部に、林道の痕跡を確認した。

2回目の探査。中塩原から、北に延びている村道を北上し、大きく右にカーブしている村道近傍で、林道入口を確認することができた。(後になった気がついたが、この林道の入口部分は国土地理院の2万5000分の1の地形図に、剃り残しの髭の長さで描かれていた。) 林道を徒歩で先に進む。林道は予想外に幅があり、勾配も極めて緩い。場所によっては、切り通しともなっている。この道こそ、文献による、オート三輪車道、トロッコ道であったと確信した。林道を進んで行ったら、直に林道は極めて大きく破壊され、通常での通行は不能となっていた。先方に、林道が続いているのは確認できたが、ここで断念。成果は、トロッコ道を確認できたこと。次回は、この手前から沢に下ることしよう。

第3回目。岩友と一緒に探査をすることにした。岩友が本鉱山に関する資料などの事前調査で、沢登り愛好家によるシラン沢登攀のレポートを探し出した。このレポートにはシラン沢の途中に鉱山跡、鉄索ケーブル、坑口跡があることが記されていた。沢の大部分先である。このレポートに確信を持った。今回は前回行き止まった、林道崩壊箇所の少し手前付近から沢に降り、転石を確認しながら、沢を遡上した。沢は広く、勾配も緩やかなので、遡上は容易である。が、そのうちに、又大きな砂防ダムが眼前に現れた。右岸を巻けそうな気がしたが、時間も大分経過しており、前進を断念。1週間後の再探査を確認して、ここで帰還。帰還途中、左岸の上に見える林道跡に登ってみた。登った場所は、立派に林道は残っていた。林道に沿って下っていくと、眼前にあったはずの橋が完全に崩壊し、目の先にある向こうの林道に行くことはほぼ不可能であった。左岸上部にほぼ水平水準で延びている林道(かつてのオート三輪道、トロッコ道)は、各所で崩壊しているようである。時間の余裕があれば、確認するのも良いが、沢を利用するのが良さそうである。

第4回目。朝9時に林道入口に到着。順調に沢を遡っていく。前回断念した砂防ダムを、右岸側から困難無く迂回した。先に進んでいくと、コンクリートの橋脚が沢の両岸に、しっかりと残っていた。付近の上空には、鉄索のケーブルがのびており、だだ1個のバケットが空中で揺れていた。ここが、鉱山跡と確信した。ここまで、沢の左岸上部には、所々に石垣組、斜面の切り欠きがあり、林道の存在が確認できていた。橋脚の当たりで、林道は同水準となっていた。近傍右岸に坑口跡も確認した。

橋脚の所から、少し沢を遡ると、右岸に、広いプラトーがあり、その一帯に明瞭な鉱山跡を確認した。大きな立方体形状のコンクリート、導水管、鉱石選別用と思われる大きな金属製ローラー、等々。

沢登り愛好家のレポートによれば、更に上流に、立派な坑口跡があるはずなので、その確認のためにも、更に沢を遡った。が、数日前の季節外れの降雪による残雪、沢への倒木の多さ、時間も大分経ってしまったことから、途中で退却。

この鉱山跡への経路は次の通りである。東北道的那須・塩原インターを降りて、塩原方面へと400号を西行して行く。中塩原の所で、右折する。400号での右折箇所は、橋を渡ると直ぐ左に学校、そして少し先の右側に「木の葉化石園」があるので、それを目標にすると良い。舗装されている村道を道なりに上っていく。現地の人の話では、運動公園のあたりで、昔は水晶が拾えたとか。林道の拡幅で消滅してしまったようである。最初の大きな右カーブの所に林道の入口がある。このカーブ付近に数台は駐車できる。4輪駆動車ならば、林道に入り、100 m～200 m進んだあたりに、空き地があるので、そこに駐車するのも良い。

林道を進んでいくと、所々で、林道の修復の跡を確認できる。東電は送電線、鉄塔の保守管理のために、破壊された林道を修復はしている。必要な所までの林道までだが。図2で、沢の上空に架かっている送電線が確認できよう。この送電線と林道が交わるあたりから、斜面を下り、沢に降り、遡っていく。

探査日 2015年11月26日、その他

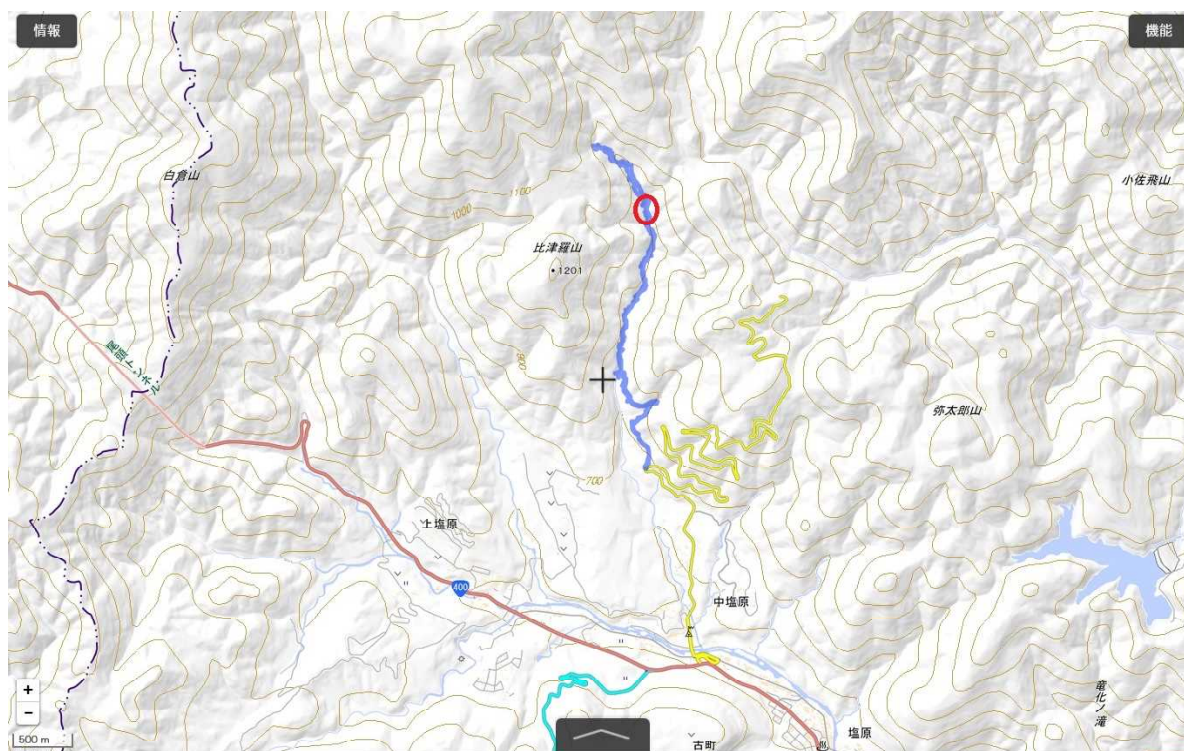


図1 400号から、中塩原で黄色の林道を北上していく。最初の大きなUターンの箇所から、林道に入っていく。薄青の軌跡が、ガーミンで測定した経路曲線。赤丸位置が、確認できた第3塩原鉱山跡。林道入口から鉱山跡まで2時間から3時間。沢での転石探しに時間をとらなければ、2時間弱か。

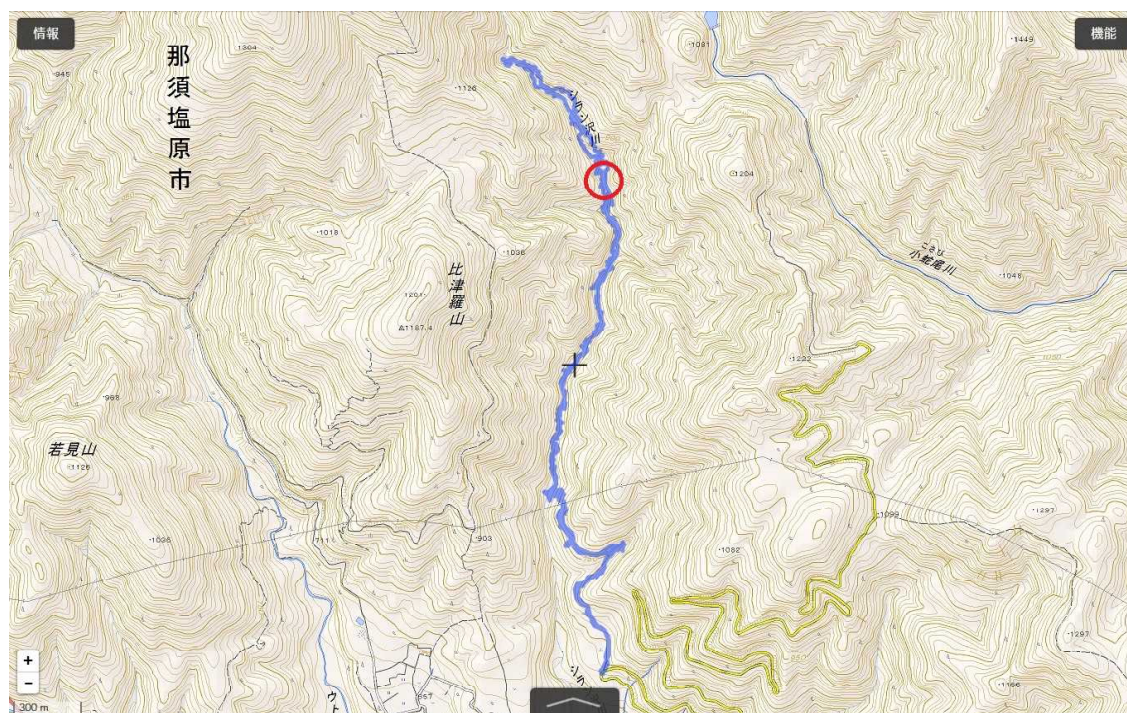


図2 図1を少し拡大した地形図。林道を進んでいくと、上空に送電線を確認できる。その付近から沢に降りる。斜面は少し急かもしれない。沢は広くなだらかなのである。良い沢歩きができよう。途中、沢には幾つかの砂防ダムがあるが、巻くのは容易である。なを、沢の送電線の位置する箇所の少し下流には、非常に高い砂防ダムがある。巻くのも困難である。このダムは、探査2回目で突き当たった砂防ダムである。

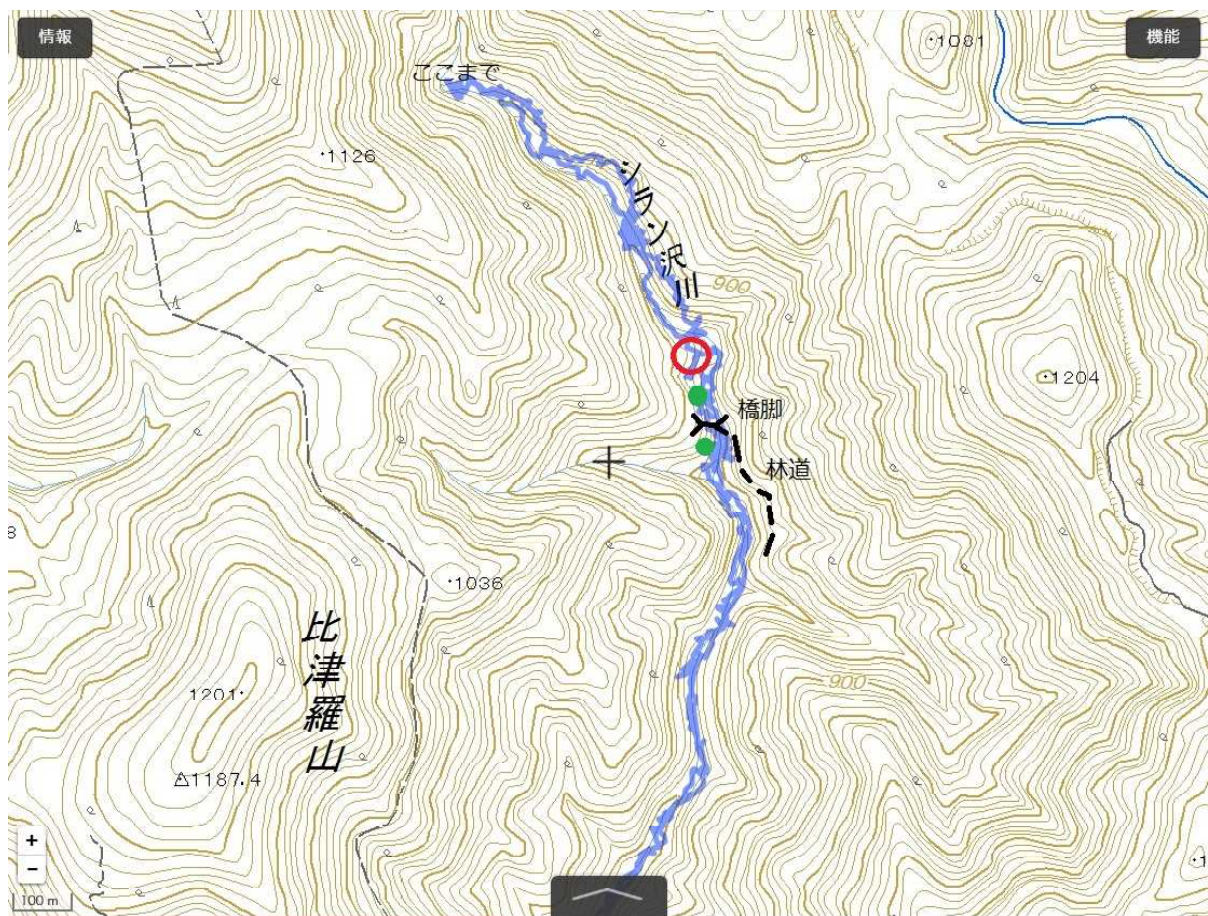


図3 広くなだらかな沢の兩岸に、コンクリート製橋脚、沢の上空には、鉄索ロープ、坑口跡、プラト一部には鉦山施設跡。付近一帯には露頭鉦脈も散見される。沢を標高900mまで遡った所で、戻り。参考にした沢登りのレポートによれば、これより上流に立派な坑口跡がある。資料及び探査結果を照合すると、個の坑口跡の標高は大凡950m。鉦山の標高は800mなので、この坑口は試掘坑であったのかも。赤丸が鉦山施設跡。黄緑丸が坑口跡。

鉦山跡写真



写真1 沢の兩岸に直方体形状のコンクリート製橋脚。左側は、行き止まりであるが、山の斜面は露天掘りされたような様相をしていた。季節外れの降雪で、残雪が白く残っている。

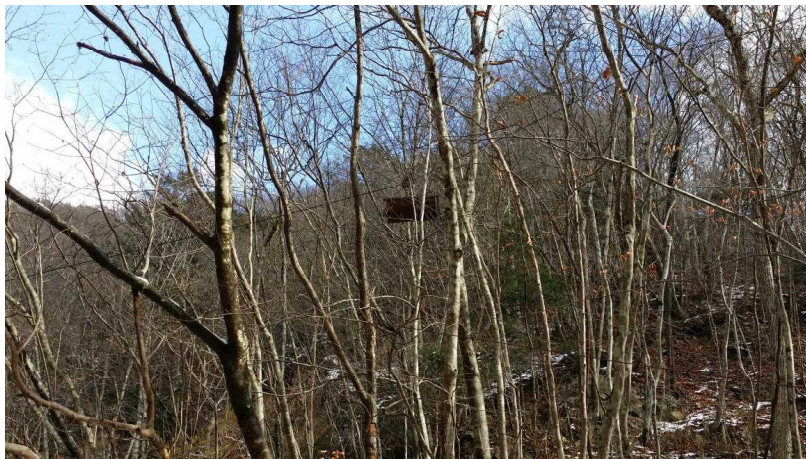


写真2 沢の上空に、鉄ロープが見え、バケットが一つぶら下がっていた。鉱石はトロッコ道で搬出したと思うが。この鉄索はどこどこを連絡していたのであろうか？



写真3 沢の右岸のプラト一部にあった鉱山施設跡の1様。用水管、コンクリート基台。多分、選鉱用であったのであろう。



写真4 同上。金属製円形のローラーである。回して選鉱したのであろう。トロッコ用レールもある。



写真5 坑口の一つ。穴が小さいように見える。崩壊した後のようである。



写真6 他の坑口跡の内部の様子。入口全体の写真を撮るのを忘れていた。しっかりと掘り込んでいるが、奥行きがない。坑道の下部が埋もれてしまったのかも。

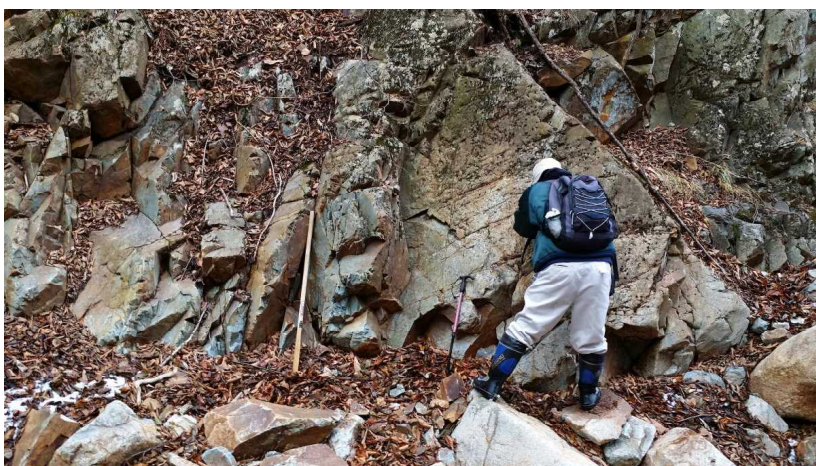


写真7 露頭鉱脈の一つ。付近には薄いものも入れれば結構露頭鉱脈がある。鉱脈観察には良いであろう。

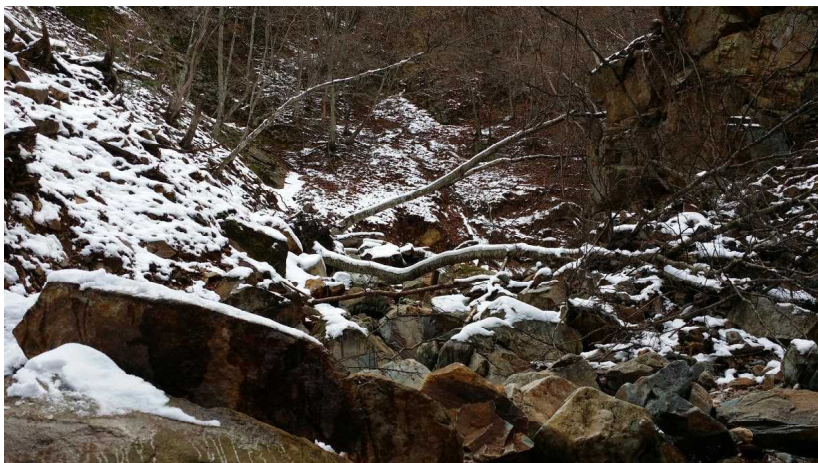


写真8 沢を標高900m以上まで登った。が、ご覧のように残雪と、倒木。黄鉄鉱の入った転石はあった。ここで断念して戻る。

採集鉱物写真



写真9 転石として採集した磁鉄鉱。文具用リング型フェライト磁石が張り付いている。



写真10 同じく転石として採集した、ニキビ状黄鉄鉱富の鉱石

参考文献

- (1) 「栃木県塩谷郡三依・塩原地区地下資源調査報告」、通産省技官 梅本悟、郷原範造、1953年。
- (2) 「塩原図幅地質説明書」、通産省技官 岩生周一、今井均、昭和30年。